

農村コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルとその構築：普及指導員調査からのアプローチ

講演者／京都大学こころの未来研究センター 内田由紀子氏

京都大学経営管理大学院 竹村幸祐氏

日時／平成25年11月20日（水）午後2時～4時30分

場所／農林水産政策研究所セミナー室

食料・環境領域

主任研究官 林 岳

農業・農村を対象とした社会科学系の研究では、社会学、経済学などの手法を用いた分析は数多く見られるものの、心理学の手法を用いて行った研究分析はあまり見られません。このような中、京都大学こころの未来研究センター内田由紀子准教授と京都大学経営管理大学院竹村幸祐助教のお二方は、社会心理学の手法を用いて農業普及指導員を対象とした研究分析を行い、その成果は『農をつなぐ仕事』（内田・竹村（2012））としてまとめられています。

このたび、内田先生、竹村先生にこのご著書の内容を詳しくご講演いただいたセミナーを開催しましたので、その内容をご紹介します。

1. 研究のきっかけ

農業普及指導員を研究対象として取り上げるようになったのは、近畿農政局普及課の担当者がこころの未来研究センターに来訪されたことがきっかけでした。その際、担当者からは農業普及指導員とは人と人のこころをつなぐ仕事であり、農業社会のコーディネーターだが、その仕事は数値で評価しにくいという話をうかがいました。最近、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）という言葉が用いられるようになり、人と人のつながり、すなわち社会的ネットワークも人工資本や自然資本、人的資本などと同様に社会の生産性に大きく影響を与えていると言われています。農業普及指導員の仕事は単なる技術指導に留まらず、関係機関との連携・協働を促進するコーディネーター機能を持ち合わせており、これはまさに地域のソーシャル・キャピタルを向上させる機能と言えます。このようなことから、心理学の手法で「つなぐ」仕事の役割をデータで示すことはできないかと考えたのが研究プロジェクトの始まりでした。

2. 農業普及指導員への調査の概要と結果

研究プロジェクトでは、(1) 普及活動を担う人々

の特徴、(2) 農村社会の問題解決・暮らしに貢献しやすい普及活動の抽出、(3) ソーシャル・キャピタルを向上させる農業普及指導員の特徴の抽出を目的に農業普及指導員へのアンケート調査を行いました。2009年度に近畿6府県、2010年度に全国、2011年度に愛知県という範囲で農業普及指導員へのアンケート調査を実施し、このうち2010年の全国調査は全国農業改良普及職員協議会の協力の下、全国47都道府県の7,241名の農業普及指導員にアンケート調査を行い、このうち4,355名から有効回答を得ました。具体的な分析方法について、(1) では尊敬する農業普及指導員の有無、その人の性別、回答者本人との年齢差を回答してもらい、さらに41項目の能力・スキル・特徴について、その人に該当するかどうかを尋ねました。また、(2) については、Cohen's d という効果量を算出することで効果が大きい支援策を明らかにしています。そして(3) については、地域住民の信頼関係と農業普及指導員本人の特徴及びその他の要因（職場の人間関係、地域との結びつき）の相関関係を調べることで農業普及指導員の特徴を明らかにしました。

その結果、(1) 農業普及指導員が尊敬する先輩とは、他者志向、情熱、チームワーク、視野の広さなどを持つ人であることが示され、特に他者志向やチームワーク、視野の広さは他の公務員の職種におけるロールモデルとは大きな差が生じ、農業普及指導員のロールモデルの特徴と考えられます。次に、(2) 問題解決に有効な支援活動とは何かについては、関係機関との連携調整、農業者同士の連携、ビジョンの提示、地域の具体的問題の指摘などが挙げられました。一方、生産技術の紹介については、新規就農者に対しては大きな効果があることが示されています。最後に、(3) ソーシャル・キャピタルを向上させる農業普及指導員の特徴については、他の関係機関との連携活動能力、コミュニケーション能力・対人関係能力、知識技術といった農業普及指導

員本人の資質とともに、職場の人間関係や地域との結びつきなども影響していることがわかりました。このようなことから、農業普及指導員は他機関との連携や職場の人間関係を通じて普及活動を行い、それによって地域住民同士の信頼・連携を醸成し、地域のソーシャル・キャピタルを向上させることが明らかになりました。

今後は、普及指導員の自己評価のみならず、関係機関や農業者から農業普及指導員を評価してもらう他者評価の実施、地域特性、生業特性の検証などを行う予定です。

3. 「力を合わせる」ことの社会心理学

さて、ソーシャル・キャピタルとは人と人のつながりや信頼関係が生産性に影響を与えていることは先にも触れましたが、人と人がつながり力を合わせることで一人ではできないこともできるようになる反面、人が集まることでむしろ問題が悪化することもあります。社会心理学では、傍観者効果や集団への同調性（Asch（1951））が生じることが示されています。このように人は周りの影響を受けやすく、さらにそれは互いに影響し合い、良い方向、悪い方向のどちらの方向にも「影響の連鎖」が生じる場合もあります。結局、人が不安に陥ることが原因で信頼関係を構築できず、相互協力関係が達成できないこともあるのです。

このような人の不安を解消するためには一堂に会して情報を全員で瞬時に共有することが有効になることがあります。これにより、人の不安が解消されれば一人一人がやる気を発揮し、生産性を向上させることができます。また、個人のやる気を出すためには、報酬を与えることが有効とされています。しかし、報酬がなかった状態から金銭報酬を新たに与えることでやる気を出すことはできませんが、ひとたび報酬が与えられると報酬なしではやる気が失われるという点に注意が必要です（Deci（1971））。さらに、人が集まって「知恵を寄せる」際の秘訣としては、お互いの気遣いと参加者間での会話のまんべんなさが重要です。このように、集団には力がありますが、人々の不安からその力を発揮できなくなることもあり得ます。このような人が集まる際の不安を解消し、信頼関係を築くためには人と人を橋渡しするつなぎ手の存在が有効です。つなぎ手がいることで不安を感じる初対面の人に対しても信頼が生まれやすくなります。

この「つなぎ手」の役割を担うのが農業普及指導

員です。実際にみなさまに思いを伝えたいある農家さんに代わり、第三者的立場からそれを伝えることで話がスムーズに進んだ例や、新規就農者受け入れの際の里親研修制度などがこの「つなぎ手」機能を活用した事例と言えます。このように、農業普及指導員には、地域の人が集まって集団の力を発揮するためのつなぎ手としての役割があり、さらに農業普及指導員以外にも信頼をつなぐ上手な仕組みを作ることが必要となるでしょう。

参考文献

内田由紀子・竹村幸祐（2012）『農をつなぐ仕事』創森社。

Asch, S. E. (1951) "Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgment", in H. Guetzkow (ed.) Groups, leadership and men. Carnegie Press.

Deci, E. L. (1971) "Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation", *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 18 (1), pp.105-115.



内田由紀子氏



竹村幸祐氏